

DRI 調査レポート No.1, 2003

# 平成15年7月梅雨前線豪雨による九州水害調査報告

## 調査概要

7月19日頃から梅雨前線が、北陸地方から対馬海峡付近にのび、停滞した。この前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込み、前線の南側にあたる東日本から西日本にかけての広い範囲で大気の状態が非常に不安定となっている。このため、20日の未明から明け方に、熊本県を中心に非常に激しい雨が降った。その後一時雨の降り方は弱まったが、20日の夜から21日の朝にかけて、大分県、長崎県、山口県などで1時間に50ミリ以上の非常に激しい雨が降った。(内閣府第3報から)人と防災未来センターでは専任研究員永松伸吾と事業課主査白石豊を現地に派遣し、被害状況の調査をおこなった。

## 調査行程

### 7月22日

17:00 熊本県庁ヒアリング(防災消防課訪問)

20:00 水俣市役所

### 7月23日

9:30 水俣市宝川内(ほうがわち)集(あつまり)地区被災現場調査

11:00 「葛彩館(かつさいかん)」(宝川内地区避難所)訪問

12:00 水俣市湯出(ゆで)新屋敷地区(深川地区)被災現場調査

13:00 水俣市災害対策本部訪問

15:30 鹿児島県菱刈町前目(まえめ)被災現場調査

### 7月24日

9:40 ヒアリング(福岡県庁・福岡市防災課・福岡市交通局)

11:50 太宰府市三条被災現場調査

13:40 福岡市内被災現場(壱粕、西月隅、板付、山王、比恵等)

## 右図 梅雨前線による被害の全体像 (黄色が調査対象災害)



## 熊本県水俣市における土砂災害

消防庁によると、水俣市では、7月20日4時18分に宝川内地区で大規模土石流が発生し、15名が死亡、引き続き4時35分頃には深川新屋敷地区において土砂崩れが発生し4名が死亡した。調査当時はまだ4名が依然として行方不明であり、現地では救助活動が継続中であった。熊本県庁では危機管理監付参事の有馬啓喜氏から現在の県庁の状況や対応などについて説明を受け、資料の提供を受けた。それによると、今回の災害では自衛隊への派遣要請はスムーズに行われたという。過去に発生した山火事などでの派遣要請を行ったことがあり、その後平時からも情報交換の機会を設けていたことを理由に挙げている。また、県庁からは災害現場に職員を2名派遣し、情報収集や県と市の調整に当たっているという。「現場の緊張感がかかる人間でない」と地元自治体との調整は困難であるとのことであった。



有馬氏(写真左奥)から説明を受ける永松専任研究員(右手前)。



左 土石流に押しつぶされた車両



中 がれき撤去の様子



右 土石流の痕跡。



上 市庁舎一階に積まれた救援物資  
下 葛彩館で吉本氏(右奥)から説明を受ける永松研究員(左手前)

現場付近での搜索作業はほぼ終了していた。すでに重機を使ったがれきや土砂の撤去作業が現場の中心作業であり、九州電力の関係者が電力の復旧作業にあたっていた。

またマスコミ関係者は各社一人ぐらいがカメラを持って張り付いている様子。後の水俣市役所や避難所に比べると現場取材のピークはすでに過ぎた様子が伺えた。

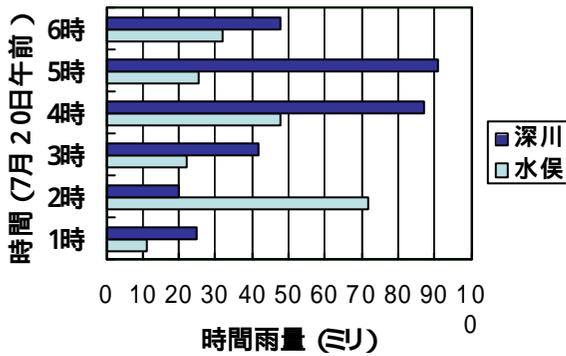
被災地から下流へ数キロ下ったところに、最近開設されたばかりのコミュニティーセンター「葛彩館」があり、ここが被災者の避難所として利用されていた。

避難所の運営責任者である吉本氏は水俣市教育委員会生涯学習課長である。吉本氏によると、この避難所には最大63名の被災者とその親族などが宿泊したという。現在の現場のプライオリティーは搜索活動と犠牲者の葬儀にあり、「現在はボランティアに手伝ってもらえる状況ではない」という。これらは地元の人間が互いに支え合いながら行っているという。

また「被災者に早く日常を取り戻してもらうことが何より重要」であるとの観点から、弁当だけでなく、みそ汁を提供したり、出来る限り制服で被災者の前に姿を現さないなどの配慮を行っているという。現場として被災者や現地のニーズを汲み取り、市などに対策を訴えていくのも重要な仕事だと言い、「ここから市を突き動かしていくぐらいでないといけない」と現地のニーズ把握の重要さを語っていた。



写真左 深川新屋敷地区で起きた土砂崩れ現場の全景。撮影者が立っている道路を挟んで向かいに避難所がある。  
写真右 同現場の近景 宝川内地区に比べるとがれき撤去作業が進んでいないように見える。



この災害では水俣市による避難勧告が遅れたことが一部マスコミで報道された。水俣市が避難勧告を市内全域に発令したのは、20日5時20分であり、すでに宝川内地区でも深川地区でも発災した後であった。加えて情報伝達のミスなど行政対応の問題点も指摘されている。

しかしながら、発災当時の雨量は深川地区で91ミリを記録するなど、屋外への避難すら容易ではなかったことが想像されるため、仮に勧告を出したとしても避難が出来たかどうかは疑問である。この点についてはより詳細な調査と分析が必要であろう。

深川および水俣観測所の災害前後の降水量

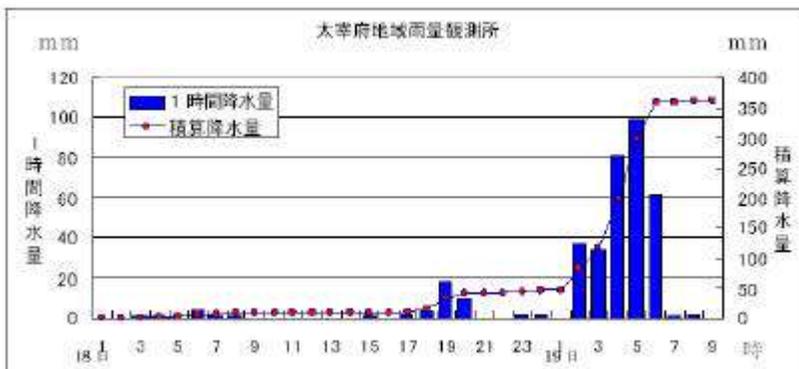
### 鹿児島県菱刈町前目における土砂災害



この現場では、同じく20日早朝に土砂崩れが発生し、2名の犠牲者が発生した。規模はそれほど大きくないものの、土砂が民家を直撃していたことが人的被害の発生につながったと思われる。しかしながら、宝川内や深川新屋敷の現場に比べると規模が小さいだけに、数10メートル避難していれば身の安全が確保されたのではないかと惜しまれてならない。

左 菱刈町前目の現場写真。手前に献花されている

### 福岡県太宰府市における土砂災害



19日5時43分頃に、福岡県太宰府市三条で発生した土砂崩れにより40棟に被害が発生し、79歳の男性が死亡した。この現場は先の事例とは異なり、都市部周辺で宅地開発が進行した地域である。そのことが宅地被害の大きさにつながったと思われる。

## 福岡市における洪水被害

福岡市では19日午前5時から6時にかけて、市内を流れる御笠川・綿打川からの溢水によって、博多駅周辺に浸水被害が発生した。福岡市がまとめた主な被害の状況としては、7月23日時点で負傷者1，床上浸水691件であり、うち676件が博多区に集中している。今回はこの博多区の浸水被害を中心に調査した。



左 博多区堅粕の公園に廃棄された家具 中 堆積したヘドロを処理中 右 堅粕 JR高架下。永松の胸元まで水位があったことが伺える



決壊した御笠川護岸(上)と流水により塀が流失した民家(下)  
ボランティアセンターとなった集会所(右)

福岡市では1999年6月29日にも大規模な都市水害に見舞われている。そのため市民からは行政に対する強い不満の声も聞かれたが、実際今回の水害の規模は前回をはるかに上回るものであった。例えば福岡市交通局によると、地下鉄の冠水量が約10000tと、前回の1000tのおよそ10倍であり、331本、時間にしてほぼ一日運休することとなった。(前回は80本3時間41分)

訪問時にはすっかり水は引いており、片づけ作業が進行している最中であった。博多駅に近い堅粕地区については、路地に入ると被害の跡が散見された。

最も被害が大きかったと言われるのが、福岡空港の南側に位置する西月隈地区である。ここでは19日に10数世帯が避難しており、ほとんどの家屋は床上浸水の被害を受けているようであった。西月隈の復旧作業には最大160名の人員があたっている地元自治会のリーダーシップのもと、消防団やボランティアによって作業が進められているが、福岡市市民局防災課職員や博多区の防災担当職員もボランティアとして参加するなど、興味深い「共助」の形態がみられた。



DRI 調査レポート No.1, 2003



財団法人 阪神・淡路大震災記念協会  
人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2  
TEL : 078-262-5060, FAX : 078-262-5082